

国立病院機構熊本医療センター

No.202



くまびょう NEWS

NHO KUMAMOTO MEDICAL CENTER KUMABYO NEWS

発行所
国立病院機構熊本医療センター
〒860-0008
熊本市中央区二の丸1番5号
TEL (096) 353-6501(代)
FAX (096) 325-2519

新年度のご挨拶

院長 河野 文夫



早いもので、私が院長になりまして満2年が経過し、3年目を迎えます。この間、当院がなんとか無事に過ごすことができましたのは、ひとえに開放型病院の先生方の多方面にわたるご指導、ご支援の賜物でございます。深く感謝申し上げます。

世間ではアベノミクスの影響で、日本経済はやや上向いてきていると報道されていますが、このところ円安の影響もあり貿易収支がマイナスとなり、景気の陰りが見えてきたように思います。一方、国際的には、隣国の韓国、中国との関係、北朝鮮、ウクライナ情勢など予断を許さない状況が続いております。

さて、当院では、昨年末に、念願でありました病院機能評価を受審することができました。約1年かけて職員全員で取り組みました。そして3月12日に待望の認定の報せが届きました。しかし本当の改善はこれからだと思えます。今後は、病院機能評価のために成し遂げた多くの改善を継続し、すべての職場で持続的なさらなる改善を図りたいと思えます。そのために、QCサークル活動（Quality Control：品質管理）に取り組もうと思えます。

また、本年は、4月に診療報酬改定があり、過去2回のプラス改定から一転してマイナス改定となり、さらに消費税の問題もあり、我々医療界にとりましては厳しい現実に対峙しなければならないようです。ただ、今回の改訂で、当院の念願で、ほぼ諦めていましたDPC急性期病院Ⅱ群への昇格が認められましたことは朗報でした。

なお、呼吸器内科の件では、皆様に大変ご心配をおかけ致しましたが、4月からの呼吸器内科外来は、熊大呼吸器内科より週2回、さらにほかにも呼吸器内科医の応援を確保しました。また、入院につきましても、呼吸器専門医1名、総合診療医1名が赴任され、さらに重症例は救命救急科が協力しますので、入院診療にも目処が立ちました。しかしながら、平常通りの呼吸器内科診療を行うには、しばらく時間がかかると思います。先生方のご理解とご協力をお願いします。

本年度が、先生方にとりまして実り多い1年となりますことをご祈念申し上げますとともに、本年度もどうぞよろしくご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2014年4月1日

基本理念

最新の知識・医療技術と礼節をもって、
良質で安全な医療を目指します。

運営方針

1. 良質で安全な医療の提供
2. 政策医療の推進
3. 医療連携と救急医療の推進
4. 教育・研修・臨床研究の推進
5. 国際医療協力の推進
6. 健全経営

患者様の権利

1. 良質かつ適切な医療を公平にうける権利があります
2. ご自身の医療について理解しやすい言葉と方法で十分な説明と情報を受ける権利があります
3. 病院から説明と情報を得た上で、自らの意志で治療を受け、あるいは選択し、拒否する権利があります
4. 自分の診療記録の開示を求める権利があります
5. セカンド・オピニオンを求める権利があります
6. 個人としての人格の尊重とプライバシーの保護を受ける権利があります



「熊本医療センターから学んでいます」

岸病院
院長 岸 泰至



熊本医療センターのスタッフの方々にはいつもお世話になります。ありがとうございます。昭和60年福岡大学を卒業して熊本大学麻酔科に入局しました。国立熊本病院では 宮崎先生、岡本先生のご指導を受けました。ペインクリニックを初めて指導してくださったのは岡本先生だったと思います。現在は菊池市泗水町で父と一緒に開業しております。私共の岸病院も父が2外科から開業して消化器外科を中心にしていたのですが、社会の変化に対応して、20年前に私が自家開業に戻る際にすべて療養型病床で新築

いたしました。

熊本医療センター（国立病院）は昔から内科系外科系とバランスが取れてほとんどの診療科が充実しています。私たち開業医には大変心強い病院です。加えて、近年は救命救急センターのご活躍により患者さんのお願いがしやすくなりました。

最近ACLS、緩和ケア研修会、プライマリーケア連合学会研修会などに出席していますが、患者さんの病気だけではなく患者さんの状態を考えて治療にあたることの重要性を教えられることが多くなりました。病気や身体状況はもちろん、環境や社会的な状況も理解して寄り添うことが必要だとよく教えられます。

熊本医療センターに患者さんの治療をお願いしますが、先生方とのやり取りがたいへん勉強になっています。まだまだ、学んでいくことがたくさんあります。今後も熊本医療センターの先生方の御治療から実地にお教えいただきながら、地域医療研修センターでは症状・疾患別セミナーで勉強させていただきたいと思います。

毎日毎晩の激務の中で熊本医療センタースタッフの皆様のご健康が気遣われますが、今後とも益々のご健勝を祈念申し上げます。

『地域医療研修センター運営委員会』が開催されました

～平成26年度1年間の研修プログラムが決まりました！～

平成26年2月25日16時より当院の応接室で、多数の院外の委員の先生に御足労いただき、地域医療研修センター運営委員会が開催されました。開会挨拶で運営委員長の福田稗熊本県医師会会長が、これまで当研修センターが行ってきた全職種を対象とした数多くの研修が地域医療に多大な貢献しているとの評価を受けていると述べられました。特に看護職等のコメディカル部門においては、第一に研修する機会自体が少なく、研修会があったとしても参加費が高額なことが多いのに対し、当研修センターでは多くの研修をリーズナブルな参加費で提供している点でも高い評価を得ているとの意見もいただきました。

当研修センターは開設以来29年目を迎えますが、こ



地域医療研修センター運営委員会の様子

れまでの研修を継続するとともに今後さらに内容の充実に努めて参りますので、御参加方よろしくおねがい申し上げます。

(地域医療研修センター主幹 富田 正郎)

退任のご挨拶

内科部長

東 輝一郎



長い間大変お世話になりました。糖尿病・内分泌内科の開設当時から多くのご支援をいただき心より御礼を申し上げます。熊大第3内科（後に腎臓内科と消化器内科へ分化）から初めての派遣医師として着任した

のが、ついこの間の様な気がします。在任した約27年間に古い病棟が新しくなり、当科の名称も新病棟移転を機に内分泌・代謝内科から現在の名称へと改名されました。糖尿病では妊娠糖尿病が驚くほど増えましたし、甲状腺疾患以外のまれな内分泌疾患もたくさん紹介していただきました。おかげでスタッフの数も増え、一步一步ですが充実した科に成長することが出来ました。どうも有り難うございました。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

事務部長

重松 和俊



この度、人事異動により福岡東医療センター（福岡県）へ異動することとなりました。2年間という短い期間ではございましたが、先生方には大変お世話になりました。

当院は「何時でも、何でも断らない救急医療」をモットーに平成23年にはヘリによる救急搬送の開始、25年からは救急ワークステーションの開設により一層充実した救急医療体制が構築できたと思っております。

これも、先生方のご指導の賜だと感謝申し上げます。

引き続き、地域の先生方との連携強化、救急医療の推進を図って参りますので、ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

副看護部長

石橋 富貴子



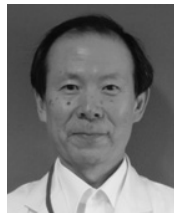
4月1日付で国立病院機構宮崎東病院へ転勤することとなりました。当院での2年間では改めて地域連携の重要性・有難さを学ばせて頂きました。熊本は医療機関の機能分化がなされ、患者様にとって、ベストな医療・療養環境が整えられています。シームレスで地

域完結型の医療の展開を目の当たりにできたことは私自身の財産だと思っております。今後は当院での学びを活かし、与えられた役割を果たしていけるよう精進して参ります。最後になりましたが、地域医療機関の皆様のご健勝と益々のご発展を祈念致しますと共に日頃のご協力に感謝申し上げご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

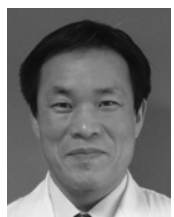


2014 診療科紹介 (70)

小児科



部長
高木 一孝 (たかき かずたか)
小児血液疾患、感染症、免疫疾患
小児科一般
日本小児科学会専門医



医長
森永 信吾 (もりなが しんご)
小児血液疾患 (血液専門医)、
骨髄移植、免疫疾患、小児科一般
日本小児科学会専門医
日本血液学会専門医



医長
水上 智之 (みずかみ ともゆき)
小児科一般、免疫不全症、感染症、
膠原病
日本小児科学会専門医
インфекションコントロールドクター

診療内容と特色

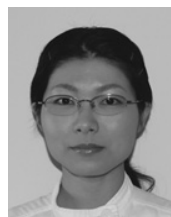
小児疾患全般にわたって診療を行なっています。小児科の特徴として感染症が多いのは他の施設と同様ですが、当小児科の特徴として小児の血液疾患の診療と食物アレルギーの診断を重点的に行っています。血液疾患は白血病やリンパ腫などの悪性腫瘍、好中球減少症、再生不良性貧血、鉄欠乏性貧血、溶血性貧血、特発性血小板減少性紫斑病、血友病などが含まれ、これらの疾患に対して化学療法、免疫抑制療法、造血幹細胞移植 (非血縁ドナー移植も含む)、輸血療法などの治療を行っています。一方食物アレルギーの診断は、入院により厳重な管理のもとで食物負荷試験を行い、除去食の必要性を判定し食事指導を行っています。なお長期の入院を必要とする学童児については、訪問学級の先生 (慶徳小学校、藤園中学校) により病棟で毎日授業が開かれています。また当院は日本小児科悪化医専門医制度研修医施設として研修医を受入れています。

診療実績

入院患者数 (平成24年1月1日～12月31) 311名
昨年はアレルギー担当医師の公休によりアレルギー関連の入院が極端に少なく、全体としては例年の6～7割程度の入院でした。



医師
緒方 美佳 (おかた みか)
小児アレルギー (アレルギー専門医)
小児科一般
日本小児科学会専門医
日本アレルギー学会専門医



医師
山元 芽衣 (やまもと めい)
小児科一般

入院疾患別内訳

呼吸器疾患 100名 (気管支炎・肺炎・RSウイルス細気管支炎、グループ症候群、喘息様気管支炎、カリニ肺炎など)

血液疾患 48名 (急性白血病 (ALL、AML)・血球貧血症候群・特発性血小板減少症、紫斑病など)

アレルギー性疾患 40名 (気管支喘息・食物アレルギー (アナフィラキシーを含む)・アトピー性皮膚炎)

消化器疾患 36名 (感染性胃腸炎 (ノロウイルス・ロタウイルス・アデノウイルス感染)・急性虫垂炎・肝障害・クローン病・腸重積症、肥厚性幽門狭窄症・腸間膜リンパ節炎など)

神経疾患 23名 (熱性痙攣・てんかん・髄膜炎・ギラン・バレー症候群・小脳失調症など)

その他の感染 27名 (EBウイルス感染症・眼瞼ヘルペス・アデノウイルス感染症・インフルエンザ脳症・化膿性リンパ節炎・劇症型溶連菌感染症・鼻中隔膿瘍・蜂窩織炎など)

事故 6名 (転倒・転落による頭部打撲・薬物誤飲・脳震盪・熱中症など)

その他の疾患 31名 (川崎病・免疫不全症・糖尿病・新生児疾患・尿路感染症・膠原病など)

教育研究

小児白血病・リンパ腫の全国的な治療研究TCCSG (東京小児がん研究グループ)、JPLSG (日本小児白血病研究グループ) の参加施設として症例の登録・治療を行い治療成績の向上に努めています。また小児再生不良性貧血治療研究に登録し抗胸腺細胞抗体 (ATG)、シクロスポリン (CSA) による免疫抑制療法、造血幹細胞移植を行っています。

研修実績

患者様のご紹介は医師へ直接お電話頂くか、患者様へ紹介状を持たせて受診して頂いても結構です。ただし、緒方のアレルギー外来は完全予約制ですので、前もって電話での予約をお願いします。時間外・休日は小児科宛の紹介状を持参し救急外来を受診して頂くと、当番の小児科医が診察致し必要に応じて入院治療を行います。小児科勉強会 (火曜会)

開業医の先生方との合同勉強会を月に一回 (毎月第4火曜日8月は休み) に行っています。紹介頂いた入院患者さんの症例呈示と文献紹介 (抄読会) です。会員制ではありませんので、自由にご参加下さいますようお願い致します。

熊病の歴史

腎臓内科

腎臓内科の歴史について書く機会をいただきましたので、血液透析や腎生検を中心に熊本における腎臓内科の歴史について御報告いたします。

国立熊本病院は熊本で最初に内科医が血液透析を開始した病院です。日本では血液透析は昭和40年台に始まりました。当時の透析は暗中模索状態で現在と比較すると大変未熟なものでした。悪名高い『外シャント』に象徴される劣悪な治療を余儀なくされ、患者にとっても医者やスタッフにとっても大変過酷な時代でした。『糖尿病性腎症』等の予後不良な疾患は適応外、年齢45歳以上は適応外、導入後社会復帰が不能な症例は適応外といったトリアージが必然でした。また血液透析は経済的負担が莫大で、長く治療を継続することは医学的のみならず経済的にも困難でした。昭和42年に透析は保険適応となり昭和46年10月更生医療法が施行となりました。国立熊本病院は昭和46年6月に石原響児先生（旧熊大二内科）が透析室を立ち上げられました。熊本では大学（泌尿器科）、済生会熊本病院（外科の原先生）に次ぐ3番目、内科医が主幹する透析室としては熊本初でした。透析を開始する予定の日赤や中央病院の先生方が国立に見学に来られたそうです。

透析台2台が当時の別館6病棟の病室を改造して設置され、昭和50年1月からは4台、平成6年9月より5台、平成7年から6台へ。平成14年2月には別館6病棟奥に新築移転して10台となり、平成21年新病院移転に伴い20台に増えました。

初代の透析室室長が石原響児先生、二代目が本多邦雄先生、三代目が前田和弘先生でした。四代目中山真人先生が平成7年に着任され以来腎臓内科専門医の担当となりました。五代目は田添昇先生（平成8年～）、六代目は成瀬正浩先生（平成11年～）、七代目は私富田が平成14年から担当しております。スタッフは平成14年当時常勤1名、レジデント1名でしたが、岩下浩蔵先生、白石直樹先生、宮中敬先生、田尻景子先生、梶原健吾先生、坂梨綾先生、三ヶ島歌織先生ら優秀な後輩達に支えられ、現在は常勤医3名、レジデント1名、総勢4名へと発展することが出来ました。関係各位の御高配の賜物でありこの場をお借りして深く感謝申し上げます。

さて、腎臓内科の守備範囲は、血液透析の他にも腹膜透析、CKD（慢性腎臓病）、慢性腎炎、ネフローゼ症候群、急性腎不全、保存期慢性腎不全、高血圧症、糖尿病、膠原病、電解質異常等と多岐です。しかし私

が考えますに公的病院の腎臓内科専門医の定義は、「腎生検をする医者」であると考えます。血液内科専門医が骨髄穿刺・生検をし、肝臓専門医が肝生検をすると同様に。

熊本で経皮的腎生検を本格的に行ってきたのは旧熊大三内科関連病院以外では熊本中央病院と熊本日赤病院（ともに旧第二内科）でした。現在では同じ熊本大学腎臓内科同門会として合流しております。

さてここから熊大腎臓内科の歴史をお伝えします。熊大の腎臓内科学教室は、平成15年4月の大学院部局化（臓器別構成化）にともない、熊大旧第三内科の腎臓グループが母体となって開講されました。旧第三内科腎臓グループは昭和53年より江藤賢治先生を中心に発足しました。発足当時熊大医学部には経皮的腎生検検査に精通した先生が少なく、その技術の習得に大変苦勞されました。以来熊本大学医学生への腎臓内科学の講義は三内が担当することとなり、昭和55年に中山真人先生へと引き継がれました。当時腎生検はヨード造影剤を使用して透視下にシルバーマン針を使用して施行していました。昭和63年に成瀬正浩先生が『エコーガイド下』腎生検を東京虎の門病院から持ち帰り熊大に導入されました。また平成2年頃より木山茂先生を中心にシルバーマン針からバイオプティックガン（半自動生検針）を用いる生検が導入されました。ガンは熊大泌尿器科から前立腺生検用の器具をお借りしたのが始まりです。エコーやガンの導入により腎生検の安全性は格段に向上し、今日でも原理的には同じ手法が用いられています。

平成6年に腎臓内科学を専門とする富田公夫教授が第三代の熊大第三内科教授として東京医科歯科大学より着任されました。腎臓内科学御専門の教授として熊本初でした。以来富田教授が熊本で腎臓病に果たしてこられた功績には計り知れないものがありました。平成25年3月に富田教授は御退官されました。腎臓内科同門会初代会長は教授が兼任されていましたが御退官に伴い平成25年4月からは二代目同門会会長に日赤の上木原宗一先生が就任されました。ナンバー内科時代の『垣根』は完全に取り払われた感があります。

平成26年4月から熊本大学の腎臓内科の新教授として、向山政志先生をお迎えすることが決まりました。新しい教授の元で熊本の腎臓内科が、そして国立病院機構熊本医療センターの腎臓内科が今までと同様、さらにますます発展することを願ってやみません。

【腎臓内科部長 富田 正郎】

PICCの研修が行われました

この度3月3日に、労働者健康福祉機構東北労災病院から外科副部長の西條文人先生と救急外科部長の武藤満完先生をお招きし、末梢静脈挿入式中心静脈カテーテル(peripherally inserted central catheter, PICC)についてハンズオンセミナーと講演会が行われました。お二人は、PICCについて大変ご経験豊富でまた全国的にも普及活動に努めておられます。ハンズオンセミナーは主に研修医と若手医師を対象として午後1時から5時まで約50名が参加してエコー穿刺下によるシミュレータ訓練が行われ、また、午後6時からは全職員を対象に、「末梢静脈挿入式中心静脈カテーテル (PICC) の挿入、管理、普及」と題して講演が行われました。

今日、内頸、鎖骨下および大腿静脈穿刺による中心



ハンズオンセミナーの様子



西條文人先生の講演の様子

静脈カテーテル法CVCが幅広く実施されていますが、気胸や感染症など重大な合併症を無視できません。PICCは肘静脈を穿刺して挿入されますが、重大な合併症は希で大変優れた手技と言われます。しかし、全国的には当院も含めて僅か5%程度にしか普及していません。これを機会に、当院において医療安全面からも推奨されるPICCの普及を図りたいと思います。

(教育研修部長 大塚 忠弘)

消防訓練が行われました

去る2月27日 更なる防火体制の確立を目的とし、火災発生時の対応や通報、初期消火、患者様の避難誘導および屋上からの救助訓練が実施されました。今回の訓練は、西消防署と当院自衛消防隊との合同の消防訓練で7階東病棟リネン室から出火し延焼拡大したという想定のもと行われました。訓練終了後、西消防署予防係の方々より講評が行われました。

病院で火災が発生した場合、発生場所毎に臨機応変な対応が求められます。常日頃から火災が発生した時にどの様に行動するかを考え患者様が安心して当院を利用してもらえるよう病院としての使命・役割を各自が十分認識し自衛消防体制をより充実させていくことが訓練に参加し重要だと感じました。

(救急医療支援業務担当 後藤 達広)



西消防署予防係の方々の講評の様子

課題も含めた西消防署からの講評の内容

- ・患者様に安心安全を提供欲しい。
- ・出火階の現場・対応状況の情報を防災センターに連絡し全館放送を流した方が良い。
- ・対策本部の資器材は充分で、立ち上げも素早く非常に良かった。
- ・消防対策本部と自衛消防隊長との情報の共有がなされ良かった。
- ・避難場所と対策本部との情報共有が必要。
- ・火災発見者は、大きな声で火災を知らせて欲しい。全体的に静かであった。
- ・初期消火体制が不十分であった。
- ・散水栓の使用が遅かった。
- ・避難の準備は、部屋のドアを閉め準備。
- ・病室の最終確認はWチェックを防ぐためドアにテープやマグネットを印をつけるなど工夫を。
- ・非常時に避難する際は、必ずフロアリストや職員リストを持って非難する。



左：消防はしご車での救助訓練
下：病棟での患者様避難誘導訓練



熊本城マラソンに参加しました

～ランナーとして参加しました～

歯科口腔外科 河野 通直

今回はグループエントリーができるとのことで、当科の研修医も誘ってみました。1秒で断られてしまい口腔外科としては、これまでほぼ全員で出場していた状況からは、残念な結果となりました。さらに、中島部長もグループエントリーしていましたが、まさかの手続きミス。結果、上田先生と7東病棟看護師2名と合わせて4名で出場となりました。

昨年同様に練習はしていましたが、本番まで1週間を切ったところで腰を痛めるアクシデントがありました。そんな中でスタートを切ると、不思議と足が動き、何とか完走することができました。グループのみんなとゴールである二の丸公園で健闘を讃え合いました。

今回も沿道での応援、ボランティアの方々、救護班の皆様に助けられ無事にマラソン大会が終わりました。



4人で参加の歯科口腔外科チーム

～ボランティアとして参加しました～

副院長 高橋 毅

今年で第3回目ですが、すでに恒例行事のように感じました。今回も、当院のスタッフと熊本市医師会の先生方、熊本県看護協会の看護師さん方との共同チームで、スタート地点、第一高校前、ゴールの3ヶ所の救護所を運営しました。昨年よりも気温が上がったせいか、今年は脱水症状の救護者が多かったように感じました。早朝より、夕方までほとんど立ち仕事でしたので、マラソンを走ったかのように足が棒になりました。ご協力をいただきました医療ボランティアの皆様には大変感謝申し上げますとともに、この場をお借りしてお礼申し上げ、敬意を表し、当院のボランティアの方々のお名前を掲示させて頂きたいと思っております。お世話になり、ありがとうございました。

熊本医療センター：(医師) 高橋毅、原田正公、橋本聡、櫻井聖大、北田真己、山田周、狩野巨平、木村文彦、原健太郎(看護師) 川内サユリ、松本メグミ、沖田典子、顚川俊也、田中幸子、堂園千代子、清田喜代美、大野智和、北川貴章、木場輪太郎、吉田理恵、今村祐太、奥山祐加、平井彩夏、櫻井美樹、上田彩貴、上田あかり、田邊典子、吉岡祥子、谷崎由里子、山下令、岡原江里、吉浦祥子、森山愛利香、福永純子、坂田由美(敬称略)



上：ゴール地点の救護スタッフ



左：最後に挨拶をされる幸山熊本市長

下：救護所でのボランティアの様子



最近のトピックス

「精神科における自殺予防の取り組み」



救命救急部・精神科医長

橋本 聡



熊本救急医療自傷・自殺問題対策協議会の研修の様子

平成24年8月に見直しされた自殺総合対策大綱は、当面の重点施策のなかに「自殺未遂者の再度の自殺企図を防ぐ」ことや、「遺された人への支援を充実する」ことなどをあげています。自殺関連事案はそのほとんどが救急病院へ搬送されるといわれていますが、当院では年500例ほどの自傷・自殺未遂症例、年20例ほどの自殺既遂症例を受け入れ、救命救急集中治療部をはじめとする他科と連携を行いながら介入を行っています。

投稿準備中のデータですが、自傷・自殺未遂の急性期に精神科介入を行った場合、未介入群と比べて濃厚介入群（入院のうえで3回以上の面接を実施）では再企図までの間隔を有意に延長できていたことが示されました（平成23年）。以来、救急部との連携をより重視し、入院症例での介入率は90%を大きく超える水準を保つことが出来ています。外来帰宅となる群での介入率改善について模索を続けております。

また、不幸にして自殺既遂（救急外来での死亡確認）となる例もあります。ご遺族にとって、大事な家族を急に亡くすだけでなく、恥や自責、スティグマなどによって孤立化することもあり、その後のケア充実は重要なポストベンション（自殺の三次予防）といわれます。このため救命救急センター・ICU看護スタッフとともに自死遺族対応チームを立ち上げ、救急外来搬入時からチームが動き出し、家族ケアを行うと同時にその後のフォローアップも行っております。約60%にチーム対応出来ており、その8割からはその後継続的

関わりに了解を頂けています。

当院精神科ではこれらの活動を通じ、熊本市医療圏における自殺予防介入の改善を図る目的で熊本救急医療自傷・自殺問題対策協議会を立ち上げ、多施設・多職種連携を図っています（平成24年11月1日発足）。これは、熊本大学神経精神科池田教授、熊本県精神科病院協会宮川会長（当時）、当院精神科橋本医師が発起人となり、熊本市民病院・熊本赤十字病院・済生会熊本病院の救急部や行政・警察・民間団体などと協働し急性期介入や遺族ケアの充実を図ろうとするものです。

この協議会では、自傷・自殺未遂などの症例検討会（計4回419名参加）、PEECコースの招致開催（日本臨床救急医学会監修 計2回49名参加）、プレホスピタル精神科系救急研修会開催（救急隊員対象 計2回35名参加）、スキルアップ研修「傾聴と共感」（看護部対象 計3回147名参加）などを企画運営しています。いずれもオープンコースで多施設・多職種の方が参加されています。

また、多職種ワーキンググループを立ち上げ危機介入パンフレット改訂案（「大切な人を亡くされた方へ」）の作成も行いましたので（拙文にて）ご興味持たれた方はご一報頂けますと幸いです。ご提供させていただきます。多数の方のお力をお借りしながらですが、当科における自殺予防活動を今後とも頑張っておりますのでご指導のほどよろしくお願いたします。

いま、国立病院機構 熊本医療センターで 何が研究されているか

シリーズ83回

口腔ケア、摂食・嚥下、NST連携パス導入に向けての検討 —回復期病院のスタッフへのアンケートを通して—

7北病棟看護師 齊木 直美、草原 麻紀、松本メグミ

当院ではH23年より脳卒中による摂食嚥下障害のある患者を対象に医師、看護師、コメディカルによる摂食嚥下チームを立ち上げました。このチームは、院内で摂食嚥下に関する取り組みを行うと共に回復期・維持期に移る後方病院に向けケアの継続・向上ができるよう「口腔ケア摂食嚥下NST連携パス」(以下パスと略す)を作成しています。約8カ月が経過し、転院先でのケアの継続に有益であったのかを評価するために本研究に取り組みましたので、ご紹介します。

【目的】パス使用が、転院先でのケアの継続に有益であったかを評価する。

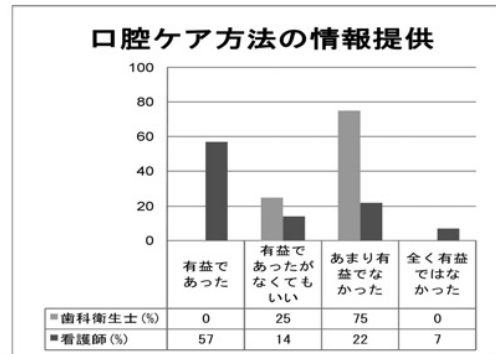
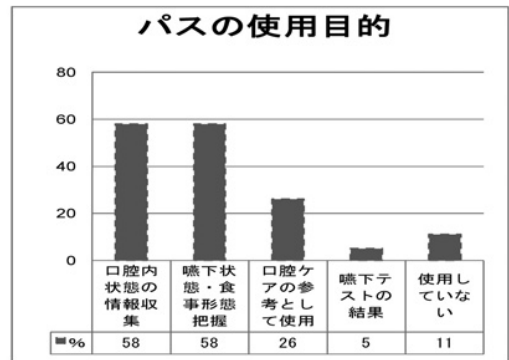
【方法】A病院の看護師22名、歯科衛生士4名を対象に①パスの使用目的、②口腔ケアの方法に関する情報提供の有益性、③摂食嚥下に関する情報提供の有益性についてアンケートを実施しました。

【結果】パスの使用目的では口腔内の状態の情報収集58%、嚥下状態・食事形態の把握58%、口腔ケア方法の把握26%、嚥下テストの評価把握5%でした。口腔ケアの方法に関する情報提供については有益44%、あまり有益でない・有益でない56%でした。そのうち、看護師の57%が有効と回答していましたが、歯科衛生士はあまり有益でない・有益でないが75%と高かったことから職種間での違いが明らかになりました。摂食嚥下に関する情報提供に対しては有益71%、あまり有益でない・有益でないが29%でした。

【考察】パスは口腔内状態の情報収集や嚥下状態、食事形態の把握等の目的で使用されており、これらの情報提供において有益であったと考えます。しかし、歯科衛生士においては実際に患者の口腔内状態をみて判断できることから有益ではないと感じていることがわ

かりました。しかし、全病院に歯科衛生士が在駐している訳ではなく、パス使用対象施設を拡大していく中で必要となることが予測されます。また、パスを使用した患者の摂食・嚥下状態の変化がわかるよう、回復期・維持期病院から当院へパスが循環するシステムを構築したいと考えます。

【結論】パスは看護師には有益であったが、歯科衛生士には有益とは言えませんでした。



口腔ケア、摂食・嚥下、NST連携パス

Table with columns for patient ID, age, sex, acute phase, recovery phase, and chronic phase. Rows include clinical status, oral care, swallowing, and nutrition. The table contains detailed medical and nursing data for multiple patients.

研修のご案内

摂食嚥下特別講演会（会費制）

～国立病院機構熊本医療センター・摂食嚥下チーム主催～

日時▶平成26年4月12日(土)15:00～17:00

場所▶国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター

座長 くまもと温石病院歯科医師

川上 剛司 先生

演題 「プロセスモデルで考える摂食・嚥下リハビリテーション」

藤田保健衛生大学医学部歯科教授

松尾 浩一郎 先生

「今回の講演では咀嚼嚥下に焦点を当て、正常から異常像まで内視鏡やビデオレントゲンの映像を交えながら説明します。また、日常の医療、介護現場で気をつけるべき口腔内の観察ポイントや専門的評価によっておいしく安全に食べることへの支援がどのように行われているか話していく予定です。」

※この講演は有料で、医師・歯科医師、コメディカル、一般は1,000円、学生は無料で参加いただけます。

医療・介護・福祉に従事されます皆様方におかれましては職種は問いません。事前の申し込みは必要ありません。どなたもお気軽にご参加下さい。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター 歯科口腔外科部長 中島 健 TEL:096-353-6501 (代表)

第151回 三木会（無料）

（糖尿病、脂質異常症、高血圧を語る会）

〔日本医師会生涯教育講座1.5単位認定〕

〔日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位<2群>0.5単位認定〕

日時▶平成26年4月17日(木)19:00～20:45

場所▶国立病院機構熊本医療センター研修室2

1. 「インスリンデグルクの使用により注射回数を減じることができた1型糖尿病の2症例」

国立病院機構熊本医療センター糖尿病内分泌内科

泉香織、坂本和香奈、橋本章子、小野恵子、高橋毅、豊永哲至、荒木栄一

2. 「分子標的薬（ダサチニブ）治療後に糖代謝が改善した慢性骨髄性白血病の1例」

国立病院機構熊本医療センター糖尿病内分泌内科

小野恵子、泉香織、坂本和香奈、橋本章子、高橋毅、豊永哲至、荒木栄一

なお、興味のある症例、疑問・質問のある症例がございましたら、お持ちいただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター糖尿病・内分泌内科部長 豊永 哲至

TEL 096-353-6501 (代表) 内線5796

第183回 月曜会（無料）

（内科症例検討会）

〔日本医師会生涯教育講座1.5単位認定〕

日時▶平成26年4月21日(月)19:00～20:30

場所▶国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター

1. 胸部レントゲン読影

2. 持ち込み症例の検討

3. 症例検討「若年発症のANCA関連腎炎の症例」

国立病院機構熊本医療センター腎臓内科

坂梨 綾

4. ミニレクチャー「リウマチ性多発筋痛症について」

国立病院機構熊本医療センター総合診療科

清川 哲志

日頃、疑問の症例、興味のある症例、X線、心電図、その他がございましたら、ご持参いただきますようお願い致します。

〔問合せ先〕国立病院機構熊本医療センター統括診療部長 清川 哲志 TEL:096-353-6501 (代表) FAX:096-325-2519



2014

年

研修日程表

4

月

国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

4月	研修センターホール	研修室
1日(火)		
2日(水)		
3日(木)		
4日(金)		
5日(土)		
6日(日)		
7日(月)		
8日(火)		
9日(水)		
10日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー	
11日(金)		
12日(土)	15:00~17:00 摂食嚥下特別講演会 座長 くまもと温石病院歯科医師 川上 剛司 「プロセスモデルで考える摂食・嚥下リハビリテーション」 藤田保健衛生大学医学部歯科教授 松尾浩一郎	
13日(日)		
14日(月)		
15日(火)		
16日(水)		
17日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー	19:00~20:45 第151回 三木会(研2) (糖尿病、脂質異常症、高血圧を語る会) [日本医師会生涯教育講座1.5単位認定] [日本糖尿病療養指導士認定更新のための研修単位<2群>0.5単位認定] 18:30~20:00 熊本県臨床衛生検査技師会 一般検査研究班月例会(研3)
18日(金)		18:30~20:30 熊本地区核医学技術懇話会(研2)
19日(土)	13:00~15:30 第132回 公開看護セミナー 「実地指導者に求められるコーチングスキル」 有限会社AEメディカル代表取締役 野津 浩嗣	
20日(日)		
21日(月)	19:00~20:30 第183回 月曜会(内科症例検討会) [日本医師会生涯教育講座1.5単位認定]	
22日(火)	18:30~20:30 血液研究班月例会	19:00~21:00 小児科火曜会(研1)
23日(水)		
24日(木)	7:30~8:15 二の丸モーニングセミナー 14:00~15:00 第13回 市民公開講座 「あなたの骨を丈夫に保つには」 国立病院機構熊本医療センター整形外科部長 橋本 伸朗 18:30~20:00 日本臨床細胞学会熊本県支部研修会 〈細胞診月例会・症例検討会〉	
25日(金)		
26日(土)		
27日(日)		
28日(月)		
29日(火)		
30日(水)		

研1~3 2階研修室1~3

※二の丸モーニングセミナーにつきまして、詳細はホームページ(<http://www.nho-kumamoto.jp/>)をご参照ください。

問い合わせ先 〒860-0008 熊本市中央区二の丸1番5号 国立病院機構熊本医療センター2階 地域医療研修センター TEL 096-353-6501(代) 内線2630 096-353-3515(直通)